



【2013-05-05】

裏土御門 陰の長者

---

「幕末動乱編」

---

連載第七回 「風魔党」

虹岡 思惟造

---

闘いの現場に駆けつけた二人がそこで見たのは、黒装束姿の者同士が無言で駆け、跳躍し、地に伏せる姿であった。すれ違いざま切り結ぶ、剣戟の響きが時折聞こえるが、数十名の者が死闘を繰り広げている現場とはとても思えない静寂さである。

「溥明様、これは忍者同士の闘いでおます」

吉蔵は溥明の背後にまわり大太刀を引きぬき油断なく身構えた。その時、溶暗の闇の中から、巨大な姿が篝火に照らされて現れ出でた。



続いてその後を追うよう現れたのは、柘植であった。柘植も黒装束であったが、覆面はしておらず、額に忍びが用いる鉢(はち)金(がね)を巻いている。先に現れた者は山伏姿をしており、右手の金剛杖を斜めに構えて、追ってきた柘植と対峙する。異様に長い顔、窪んだ眼窩、高い鼻梁は天狗か鬼神か。伸びるにまかせた蓬髪を振り乱して、打ちおろす金剛杖の威力は凄まじく、柘植が構える刀は真っ二つに叩き折られてしまった。

「柘植殿、加勢しますぞ」

柘植の危機と見た溥明が刀を引きぬきながら、柘植と敵の頭の間に入り込む。

「おのれ、邪魔立てするか」

敵の頭目と思われる山伏が、溥明を憤怒の形相で睨みつける。

「溥明様、こ奴はわてにお任せなはれ。刀で長尺の得物と闘うのは不利やさかい」

吉蔵は篝火の下で眠りこけている小田原藩兵の槍を拾い上げると、敵の頭に槍の穂先をぐいと差し向けた。

「どいつもこいつも、このわしに刃向かうとはよき度胸じゃな」

吉蔵は、溥明が十津川で剣の修業をしていた間、奈良の興福寺で宝蔵院流の槍術を学び許可を受けていた。吉蔵も六尺近い大男であり、得意の槍が得物であったから、化け物のような敵の頭と渡り合っても、決して引けはとらないであろう。

吉蔵が闘いを続ける中、溥明と柘植は後方に退いた。

「ご加勢、かたじけない」

腕を負傷したのであろう、左手で右腕を庇うようにした柘植が溥明に礼を述べる。

「して、攻防の形成は如何ですか？」

「残念ながら敵方の優勢に御座る。箱根宿の本陣に援軍を送るよう使いを出しておりますが、到着するまで何としても持ち堪えなければなりません」

道中警護の兵は百名ほどいるが、箱根宿で分宿している。箱根越えの疲れのために今頃は熟睡中であろう。すぐに駆けつけてくるとは思えない。

「接待所の中に押し入れられるようなことになれば一大事」

溥明は呪を唱え、手に印を結んだ。式神を召喚することを決断したのだ。ぼうっと白く霞むものが漂い始め、次第に凝縮して二つの人形(ひとがた)になったかと思う内に、水干姿の犬麻呂と牛麻呂が現れた。

「おん前に」

「して、御用の向きは」

柘植には式神の姿は見え、声も聞こえない。ただ陰陽師である溥明が何らかの呪法を使っているらしいことだけが分かるだけである。

「味方を助け、敵を退けよ。味方は額に鉢金を巻いておる。間違えて味方を傷つけるな。よいか」

「ご下知のままに」

「委細承りまして御座います」

犬麻呂と牛麻呂は尻尾を振り、嬉々として応えると、一陣の風となって、敵に向かって襲いかかった。

死闘を続けていた黒装束の者共であったが、敵方のみが猛烈な風に翻弄されだした。始めは何のことやらわからないまま、気力を振り絞って闘いを続けようとした敵であったが、明らかに異様な状況に気付くと、急速に戦意を喪失していった。

その間も敵の頭と吉蔵の闘いは続いていたが、さすがの吉蔵も、人間離れした敵の強靱な力技にすっかり消耗してしまった。この様子を見た溥明は、犬麻呂と牛麻呂に吉蔵の加勢を命ずる。しかしどういいうわけか敵の頭には、式神は手出しが出来ないようであった。魔除けの護符を身につけているか、あるいはこの者自身が呪力を有しているに違いなかった。

「何やら面妖な術を使うようだの。ふむ、そこにおるのは式神じゃな・・・さすればお主は裏土御門の者か？」

攻撃の手を休めた敵の頭が溥明を見詰めて問いかける。

「ほう、陰陽道に通じておるようだな」

溥明は、問いかけには答えず、独り言のように呟いて、更に言葉を続ける。

「その方たちは忍びの術を使うようだが、一体何者だ？」

「ふふ、忍びだと？我らを伊賀者風情と一緒に見るでない。我らは乱破(らっぱ)じゃ」

「乱破とは、雇われて戦場で働く者共のことであろう。誰に頼まれて我らを襲った？」

「愚かよのう、乱破は死んでも雇い主の名は明かさぬものじゃ。さて下らぬ問答はこれ位にして、今夜のところは立ち去ることにしよう。皆の者、引き上げじゃ」

言うより早く、頭を先頭に黒装束の一団は、篝火の光が届かぬ闇の中に消え去った。これを見た柘植は、すかさず配下の手練二名にその後をつけるよう命じる。

箱根宿から道中奉行並みの大久保が警護の兵を率いて駆けつけてきたのは、賊が去って間もなくの頃であった。小田原藩の兵達もようやく目覚めて、大事な役目の最中に寝入ってしまったことに気づき、うろたえるのであった。柘植は大久保に事の次第を手短に報告する。それを聞いた大久保は兵を使って賊の後を追わせようとする。

「賊は乱破の者共ですぞ。並みの者が追いつける相手では御座りませぬ。それに闇夜の山中は危険です。手練の者二人に後を追わせておりますれば、追跡はお止めなされませ」

柘植の進言に、大久保は追跡をあきらめ、周辺一帯の探索と警戒を配下に命じた。

「おっつけ、後を付けさせた者が戻って参りましょう。それまで、関所に戻り今後のことを打ち合わせ致しましょう」

柘植の申し出にその場の主だったものは同意し、揃って関所に向かった。

関所の一室に集まった大久保、柘植、溥明それに小田原藩の大番頭などが協議を始めた。そして次のことが話し合いで決せられた。先ず一つ目は、山狩りのことである。山中に潜んでいるかもしれない賊を狩りだすために、実施するものでこれは、明日以降、小田原藩が担当する。二つ目は、賊が周辺の各藩の領内に逃げ込むことが予想されるために、幕府を通じて各藩に探索を命ずることである。三つ目は、勅使への報告である。勅使の二人は、なにも気付かずに寝ているようなので、明朝、大久保が報告するとことにした。

そろそろ夜も明けようかという頃合いで、疲労の極限にあったその時、柘植の配下の者が座敷に来て、追跡していた者が戻ったこと知らせた。

「御一同にも、直接、聞いていただいた方がよろしかろう。戻ってきた者をこの場に呼べ」  
柘植に指示されて配下の者は、一旦座敷を下がったが、すぐに黒装束姿の者を伴って座敷に戻ってきた。

「おう、庄兵衛か、御苦労であった」

座敷ににじり入り、平伏した中年の男を見て柘植が声を掛ける。

「儀礼は無用じゃ、面をあげい。早速じゃが、見聞きしたことを、一同に話してくれぬか」

大久保がもどかしげに、報告を促す。

「拙者と嘉治郎の二人で、賊の後を追いましたが、賊には手負いの者がいた様で、思いの他、進む速度が遅く、すぐに敵の最後尾に追い付き申した」

「そうか、追いついたか、うむ、それで」

「しばらく進むうち、やや広い窪地に至ると、山伏姿の賊の頭が立ち止まるように命じました。そして松明に火をつけるとその周りを取り囲むようにして、一味の者が座り申した。拙者はたまたま賊の頭とは離れた松明の火もあまり届かぬところに座ったのでござるが、嘉治郎は運悪しく、賊の頭の正面に座ることになり申した。そして・・・」

庄兵衛は、そこで口をつぐみ齒を食いしばった。

「そして、どうなったのじゃ」

大久保が急かす。

「そして、賊の頭が何やら短く叫ぶと、周囲の者が一斉に立ち上がったので御座る。拙者もあわ

てて立ち上がりましたが、嘉治郎は明らかに皆に遅れて立ち上がり申した。間を置いて、又、頭が何やら短く叫ぶと、今度は皆が一斉に座りこんだので御座る。もちろん拙者も座りましたが、嘉治郎はこの時も、動作が遅れました」

「おう、それは立ちすぐり、居すぐりに相違ござりませぬ」

そう叫んだのは、小田原藩の大番頭であった。大番頭は皆に立すぐりと居すぐりについて説明した。その概要は以下のようなものであった。

～戦国時代のこの辺り一帯の領主は、北条家であったが、風魔党と称する乱破集団をその支配下に置いていた。彼等は平時、箱根の風間(かざま)という地区周辺に住み、戦があると、情報収集や後方攪乱の任に当たり、時には略奪、放火、暗殺などを行った。その風魔党が用いたのが立すぐり、居すぐりであり、北条家の史書にもそれが記載されている。

『夜討強盗して帰る時、立すぐり居すぐりといふ事あり。明松をともし、約束の声を出し、諸人同時にざつと立、颯と居る。是は敵まぎれ入たるをえり出さんための謀なり。然(しかる)に件(くだん)の立すぐり居すぐりをしける所に、紛れ入たる十人の者、あえて此義をしらず、えり出され、みな討たれけるこそ不憫なれ』～

「すると、嘉治郎は・・・」

大番頭の話聞き終えるや、柘植が沈痛な面持ちで聞く。

「斬られて果て申した」

「南無三、してやられたか」

うめくような柘植の声である。

「拙者は、その隙に賊の輪から離れ物陰に隠れ申した。お役目とは言え、嘉治郎を助けられなかったこと無念に存じます」

「伊賀者として当然の判断である。自分を責めるな。それよりも何か掴めたか？」

「一味の者共は、覆面をとり、松明の明かりで互いの面を確かめおうておりましたが、不審な者が紛れ込んでいないと判断したので御座りましょう、賊の頭はこの場で解散し、三々五々逃れ出て、水戸城下で落ち合うことを告げたので御座ります」

「なに！水戸城下じゃと？やはり、糸を引いていたのは水戸の激派の輩であったか」

大久保が叫ぶ。

「まだそうと決まったわけではありませぬ。水戸は何と言っても徳川御三家、確たる証拠がなければ迂闊なことは出来ませぬ。ここは井伊大老とも相談して、慎重に事を運ばねばなりませぬ」

激して顔を赤らめていた大久保であったが、この柘植の言葉により冷静さを取り戻したようであった。

「差し出がましいようですが、もうひとつ、説明したきことが御座ります。お聞き下されましようや？」

一同が頷くのを見て、話し出したのは、小田原藩大番頭である。

「賊の頭は化け物のように巨大であったと聞き及びましたが、実は北条家の史書には風魔党の首

領の風魔小太郎のことも載っております。そこには小太郎は七尺（約2 m）を超える身の丈があると記されておるので御座る」

北条家の史書には風魔小太郎について以下のような記述があるという。

～身の丈七尺二寸、筋骨荒々しくむらこぶあり、眼口ひろく逆け黒ひげ、牙四つ外に現れ、頭は福祿寿に似て鼻高し～

「ふーむ、牙までは生えておらぬようでしたが、良く似た容貌に御座りました」

柘植はそう言って首を振り、眉間に深いしわを寄せた。

「彼の者は、陰陽道などにも通じておるようで、誠に手ごわい相手でございます」

溥明も今さらのように、相手の恐ろしさを思いやった。

「風魔小太郎、化け物が蘇ったか！」

大久保が思わず口にしたが、その想いは一座のもの皆、同じであった。

翌朝、大久保が勅使の二人に昨夜の出来事を報告し、伊賀組と溥明主従の活躍で賊を退けたことを説明した。勅使二人は寝ていた間の事件であり、知らぬが仏で恐怖を覚えずに済んだこともあって、特に騒ぎ立てること無く、予定通りに下向を続けることになった。

昨夜の失態を挽回するべく、小田原城下から、大挙して登ってきた小田原藩兵士により、箱根宿から小田原城下までの間は、今までにも増して厳重な警護体制が敷かれた。その下り坂の道中で、柘植は改めて溥明に礼を述べた。そして、溥明が使った不思議な術について問うた。溥明は裏土御門家に伝わる呪法により式神を遣ったことを隠さずに説明した。この事件を契機にして、互いの誠実な人柄を認め合った溥明と柘植は、今までにも増して信頼関係を深めて行く。

勅使一行が箱根路を過ぎた後、小田原藩による本格的な山狩りが行われた。又、報告を受けた井伊大老は、周辺の各藩に対して、広い範囲で搜索追捕の幕命を下すが、その後の賊の行方は杳（よう）として知れなかった。

～以下次号に続く～